

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

海洋資源の流通と管理に関する人類学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008516

第1章 海洋資源の流通と管理に関する人類学的研究

岸上伸啓

KISHIGAMI NOBUHIRO

1 はじめに

文化人類学や人文地理学の分野では、農耕民や牧畜民、狩獵採集民の社会や文化を対象とした研究が数多く生み出されてきた一方で、R・ファース(R. Firth)の『マレー漁民』などを例外とすれば、^①海浜や島嶼部で海の幸を利用しながら生きてきた漁民の社会や文化に関する研究はきわめて少ない。

日本においては、一九六〇年代より西村朝日太郎や藪内芳彦によって漁撈文化の研究が行われ、一九八〇年代以降は秋道智彌や田和正孝らによって推進されてきた。^②

第一章では、おもに文化人類学分野における水産物の流通と管理に関する最近の研究について概観し、その上で、本書の内容を紹介する。

なお、海洋資源とは、広義には海底油田資源から海獣類や魚介類のような水産資源まで、海洋に関係するさまざまな資源をさす^③が、本書では水産資源に限定して使用する。また、両者を互換的に使用することもある。水産資源のおもな特徴は、(1)自己成長率が大きい再生可能な資源であること、そして(2)基本的に社会の共有資源であるが、利用者は個々の漁業者(捕獲者)であることの二点である。^③また、流通とは、ある社会の成員が生産した物資やサービスを、消費する人びとへと移転する過程を意味する。

2 「流通」と「海洋資源の管理」

流通

文化人類学では、交易、交換、分配、再分配、互酬性を分析概念や記述概念として採用した研究が多数存在しているが、「流通」をキーワードとして文化・社会現象を分析する研究はほとんど存在していない。⁴⁾

秋道は、海洋資源の需要と流通に着目し、資源を三種類に分類している。すなわち、(1)自給用食料あるいは生業活動の対象となる水産物、(2)近隣の農耕民や都市居住者に販売したり、交換したりする水産物、(3)国外市場向けの国際商品のように、生産地からはるかに離れた域外へと搬出される水産物である。⁵⁾ 流通空間に着目しながらこの分類を読み替えると、(1)は居住地内流通、(2)と(3)は居住地外への流通となる。とくに、(3)は広域流通となる。

秋道は、太平洋地域や東南アジア地域において水産物を獲得する過程、それを加工する過程、さらにその産物を輸送する過程、すなわち生産者から消費者までの間にさまざまな人間や集団が関与し、人間のネットワークが形成されてきたことに着目した。このネットワークは同一の社会集団や地域内で完結することもあるが、集団や地域を横切つて異なる民族間で形成されることもある。秋道は、このような複数の民族間を横切つて形成される流通のネットワークをエスノネットワーク (ethno-network) と呼んでいる。⁶⁾

秋道は、水産物の交換と流通をめぐるさまざまなネットワークの基本的な単位を、大別して、互酬的ネットワーク、主従的ネットワーク、パトロン・クライアントネットワークであると指摘し、これらが複数組み

合わさると具体的なネットワークが形成されると指摘している。互酬的ネットワークとは、ソロモン諸島のマライタ島の漁撈民ラウと農耕民バエグラの間にみられるような魚介類と農作物との互酬的な交換のためのネットワークのことである。主従ネットワークとは、一種の朝貢交易の形態である。その事例のひとつが、ミクロネシアの中央カロリン諸島のサタウル島、ラモトレック環礁、エラート環礁の場合である。サタウルとエラートの首長は、ラモトレックの首長に貢納品を献上しなければならなかったが、逆に台風などの被害にあうと援助としてパンの実やタロイモを贈られることがあった。パトロニックライアントネットワークとは、インドネシアのバジャウ人の小規模漁民と、彼らに必要な資材や船を貸し、その見返りとして漁獲物を優先的に売ってもらうブギス人との間の一種の契約関係のような場合である。これらの三種のネットワークはさまざまに結びつき、機能する。秋道は、典型的なネットワークとして「鎖状ネットワーク」や「櫛状ネットワーク」、「円環ネットワーク」、「樹上ネットワーク」の形態を指摘している。このネットワークを単に経済的な関係としてだけでなく、政治的・宗教的な関係として分析し、理論化することによって歴史的に多様な展開をしてきた海と人間集団の関わりを探る有力な切り口となると主張している。²⁾

一九八〇年代末以降、経済のグローバル化が急激に進み、水産資源の国際的な流通ネットワークにも変化が認められる。従来のエスノネットワークは、世界規模のより大きな流通ネットワークの中に組み込まれ、世界各地の生産者とアジアや欧米の主要な消費地とを結ぶ新たな流通のネットワークが生成されてきたといつてもよからう。

海洋資源の管理

海洋（水産）資源は、森林資源などとは異なり海水中にある。それは、貝類やナマコ、海藻などのベントス資源（底生資源）とマゲロ、クジラ、アザラシなどのネクトン資源（海中回遊性資源）に大別できる。前者は特定の場所に固定して生息する一方、後者は広域を回遊する傾向がある。さらに寒帯、亜寒帯、温帯、亜熱帯、熱帯では環境、生態条件が異なっているので、生息する魚介類、海獣類の数や種類も大きく異なる。⁽⁸⁾

生態学的な条件の違い以外にも資源を利用する側に立てば、生業漁民と商業漁民のちがいが、国家の規制が強いかわるか、商業流通のネットワークの性質によつて特定の資源の利用方法や管理方法は異なつてくるといえるだろう。

人類はこれまでさまざまな海洋資源の利用や管理のやり方を開発してきた。とくに、管理制度については、国際捕鯨委員会による大型鯨類の管理や東南アジア海域におけるサシの制度をはじめさまざまな制度や慣習が存在している。⁽⁹⁾ここでは、最近の海洋資源の管理制度について紹介する。

海洋資源の管理には、トップダウン的な中央集権的な資源管理体制（Government-based Management）、政府と地域住民（漁民）とが資源管理の責任を共同して果たす共同管理体制（Co-management）、資源の利用者が自主的に管理する体制（User-based Management）がある。共同管理の一形態として地域に基盤をおいた資源管理体制（Community-based Management）がある。フィリピンなどにおいては、近年、沿岸域資源の秩序ある利用と環境保護を目的としたより広域を対象とする沿岸域資源管理（Coastal Resource Management）が実施されるようになった。この沿岸域資源管理の内容は、(1)海域利用に関する区域設定、(2)地域の実情を反映した資源利用についての規則や仕組みの制定、(3)新たな経済活動の振興による漁村経済の活性化、(4)漁家の教育・

啓蒙運動など多様な活動からなる。¹¹⁾ 秋道は、海洋資源管理のあり方の変遷を地域に基盤をおいた資源管理から共同管理へ、さらに共同管理と生態学的な管理を統合した生態管理 (eco-management) へと進むべきだと主張している。¹²⁾

ベルケス (Berkes) は、理論的には、共有資源を利用してはいるコミュニティが部外者による資源へのアクセスを制限すること、さらに資源の利用者であるコミュニティの成員が自ら捕獲を制限することによって、コモンズの問題を解決することが可能であると考えている。¹³⁾ そして地域や国境を越えて回遊する水産物の資源管理は困難ではあるが、複数の利害関係者 (団体) が参加する一種の共同管理を有効に利用すべきだと主張している。すなわち、ベルケスは、地域の組織 (団体) を横切って水平的に、またいろいろなレベルに位置する組織 (団体) を縦に横切って垂直的に、結びつけるような形態の共同管理制度が有効であると考えている。これは一例であるが、さまざまな資源管理制度が理論的に提案され、関係者は試行錯誤をしながら、よりよい制度構築を試みつつある。

調査との関連から管理の方法を区別する場合がある。アダムズ (Adams) は、実践主導管理と調査主導管理という二つのタイプを区別している。¹⁴⁾ 対象生物の生態や漁獲統計を調査し、そのデータを吟味したうえで、モデルを構築し、管理効果を予測する。その予測に基づいて管理を行うことを調査主導管理という。一方、すでに存在している知見に漁業者の知識を加味して管理をはじめ、途中の成果をみながら管理のやり方を変更していくような管理を実践主導管理と呼ぶ。対象魚の生態や環境条件などによって両者には一長一短があり、どちらか一方が優れているとは断言できない。

水産資源の管理を実施する場合には、禁漁期、禁漁区、禁漁サイズ、漁具・漁法制限、漁獲量の制限、漁

業者の制限などがある。¹⁵⁾ これらのツールは、対象魚の生態や対象地区の社会的な条件を考慮して採用が決定される。

3 広域に流通する海洋資源に関する人類学的研究

ここでの広域流通とは、居住地（村落や市）を越えて、物資やサービスが流通する場合を指すが、その大半は商業目的の流通である。

北アメリカのラッコが、先住民と欧米人毛皮商人との交易品として取引され、それが北アメリカの先住民社会に大きな変化をもたらしてきたことは周知の通りである。¹⁶⁾

毛皮交易やそれに準ずる交易対象海獣資源としてオットセイ、クジラ、セイウチ、アザラシが知られている。これらの海獣は、北太平洋沿岸地域の先住民にとっては重要な交易のための資源であった。

一九六〇年頃から、ヨーロッパ共同体が動物愛護（反虐待）運動の影響を受けてアザラシの毛皮の輸入を全面的に禁止した一九八三年一〇月までの約二〇年間、アザラシの毛皮の交易はイヌイットにとっては現金収入源となる経済的資源であった。ここで注目すべきは、この時期のアザラシ猟には、毛皮を売るためにアザラシを捕獲していたという側面があったが、アザラシの個体数が枯渇化した訳ではなかった。このように商業目的による捕獲であっても資源量が維持される場合もあるといえよう。さらに、ヨーロッパ市場の閉鎖後に消費者側の需要が低下したために、流通の一方の極に位置する生産者（イヌイット）の経済活動に大きなダメージを与えてしまった事例でもある。

鶴見良行は、現地で消費されることなく、他地域に売ることを目的として捕獲され、もっぱら輸出される水産物を「特殊海産物」と名づけた¹⁷⁾。ナマコやハタ、フカヒレ、熱帯魚、マグロ、カツオ、カニ、タカセガイは、典型的な特殊海産物であるといえよう。

ナマコやハタ、フカヒレは、高級な中華料理の食材である。太平洋、オーストラリア、東インド諸島、日本とその周辺をフィールドワークし、かつ文献を渉獵して、ナマコの加工と流通にかかわる人びとの生活を描き出したのは鶴見良行であった。彼の著作『ナマコの眼』¹⁸⁾にはさまざまな論点が含まれているが、そのなかでもナマコ、フカヒレ、ツバメの巣など「特殊海産物」の流通は、ヨーロッパ本国と植民地とを結ぶ貿易システムからは遊離した、中国市場と深く関係する商品であった点が強調されている。さらに幕藩体制の日本、琉球王国、朝鮮王朝、スルー王国では、国家が生産から流通までを管理し、中国への（朝貢）交易品としてきたことが指摘されている。

赤嶺は、鶴見の研究を高く評価しつつも、乱獲問題や海洋汚染問題に眼が向けられていない点を批判し、独自のナマコ研究を展開させていった¹⁹⁾。彼は、干ナマコの生産現場であるフィリピンのパラワン島南部やマシ島において現地調査を実施し、生産と消費の拡大に伴うナマコ資源の枯渇化の問題を考慮しつつ、ナマコの生鮮、捕獲、加工、流通、さらにはナマコの食文化に関する研究に従事してきた。フィリピンのナマコの大半は、生産者から仲介者のネットワークを経て、香港とシンガポールに流通されている。フィリン各地で捕獲されたナマコは、プエルト・プリンサセやサンボアンガなどに仲買人によって運ばれ、それはさらにマニラに運ばれる。そしてマニラから香港やシンガポール、台北などに輸出される広大な流通のネットワークが存在している²⁰⁾。また、華人のグローバルな拡散によって、サンフランシスコやニューヨークにおいて

もナマコの需要が高いが、アメリカの華人社会に流通しているナマコは、メキシコ産やカナダ産であり、独自の流通ネットワークが存在している。⁽²¹⁾ 飯田卓や鈴木隆史によると、マダガスカルや東南アジア、太平洋で捕獲されるサメからとられるフカヒレも、さまざまなネットワークを経由して香港やシンガポール、日本に運ばれていくという。⁽²²⁾

秋道は、インドネシアの北部スラウエシやハルマヘラ島西部のカヨア島における調査によって、バジャウ人によって捕獲されたフカヒレやナマコがブギス人や華人を仲介者としてスラバヤやジャカルタなどの遠隔地に流通していることを報告している。たとえば、国境を越えて取引されるフカヒレやナマコの場合、生産者カヨア島のバジャウ人——（仲介者）ブギス人——テルナーテ（中継地）——（仲介者）華人系商人——（中継地）ジャワ島のスラバヤやジャカルタ——（仲介者）別の商人——（想定される目的地）シンガポールや香港というエスノネットワークが存在している。⁽²³⁾

香港で、消費されるハタの生産地域について西はシンガポール沖のビンタン島、南シナ海のナツナ諸島から東はインドネシアのマルク諸島までの東南アジア全域に広がっている。田和は、インドネシア南スラウエシにおけるハタ生産を調査し、ハタは従来、長期保存のきく塩干魚に加工され利用されていたが、一九九〇年代以降生産地とはほとんどかかわりのない他地域の消費地へと運ばれていると指摘している。この事実に基づき、田和は、「発展途上国では、外部から新たな商業的漁業が導入された場合、漁獲物のうち良質なものは域外へと輸出され、質の悪いものだけが現地に残され、また自家消費のための不足分が今度は輸入される結果として現地の食生活が以前より悪化してしまうことが、往々にしておこる」という指摘を行っている。⁽²⁴⁾ すなわち、ハタのような商品化した水産物の域外流通は、シアン化合物の利用による漁場の環境破壊問題の

みならず、現地における消費の問題を生み出しているのである。

欧米や日本の水族館や一般の家庭において観賞用の熱帯魚が飼育されるようになったため、南太平洋やアジアの熱帯海域のサンゴ礁に生息する熱帯魚は食料資源から商品という貴重な現金収入源に変わってきた。代表的な熱帯魚は、チョウチョウウオ、キンチャクダイ、ベラ、クマノミなどである。さらに熱帯魚の青酸カリを利用した捕獲は、環境破壊の原因でもある。

秋道は、観賞用熱帯魚の捕獲や流通について、タイのプーケット島やインドネシアのバリ島の事例を紹介している。一九九〇年当時、プーケット島で潜水漁によって捕獲された熱帯魚は、プーケット空港から香港、シンガポール、マレーシア、台湾に空輸され、国内向けはバンコクまでトラックで輸送されていた。一方、二〇〇〇年当時のバリ島では、バジャウと呼ばれる漁民によって捕獲された熱帯魚は、ヨーロッパ共同体諸国、日本、アメリカ、オーストラリアへと生きたまま輸出されている。これらの事例では、漁民は高く売れる魚種を意図的に捕獲し、契約を結んだ商人へと売っている。さらにそれらの魚は、国際的な流通網を通して輸出されていく。高い需要が続く限り、熱帯魚は活魚として捕獲される必要があるが、資源の枯渇化のみならず、青酸カリを利用した捕獲はプランクトンやサンゴを死滅させるため、環境破壊の原因となること²⁵が指摘されている。

日本は、サケの大消費地のひとつである。国内産のサケのみならず、世界各地の国々で生産されたサケが輸入され、国内に流通している。かつてはアメリカやカナダで捕獲されたサケが輸入の中心であったが、現在は、ノルウェーやチリで養殖されたものが輸入量の大半を占めるようになっていく。また、ノルウェー産やアメリカのアラスカ産のサケの一部が、東南アジアで加工された後で、日本に輸入され、外食チェーン産

業の食材に利用されている。⁽²⁶⁾

アラスカのコディアック島の先住民アルーティットは、商業的サケ漁に従事しているが、捕獲したサケを販売する以外にも日常的な食料として消費すると同時に、ギフト用缶詰を自宅で製造して、島内やアラスカ本土に住む親族や友人に贈呈している。手塚は、日本などの市場の需要や変化が先住民の商業的サケ漁に影響を及ぼしていることを指摘している。⁽²⁷⁾

ロシアのカムチャツカ半島を調査した大島稔や渡部裕によると、ソ連が崩壊した後、同地域にすむ先住民は国家の後ろ盾を失い、漁業制度の変更や市場原理のもとで経済的に厳しい状況におかれてきた。ベニザケなどの冷凍サケや塩蔵魚卵（イクラ）は、輸出商品となりうることから非先住民が経営する多数の民間企業が、サケ漁に参入している。このような状況が続けば、サケやイクラの需要が高いという条件下では、同地域のサケ資源が枯渇し、先住民の漁業や生活に悪影響がでる可能性が懸念されている。また、先住民は、捕獲したサケからイクラを製造し、販売し、現金収入源としている場合がある。⁽²⁸⁾

東南アジアでは、塩干魚は安価であり、重要なたんぱく質源である。マレーシアにおいて調査を実施した田和は、塩干魚は地域内や地域間で流通する商品であったが、最近では、ツバメコノシロのような魚を塩干にした高級な製品が、タイ、ミャンマー、インドネシアからマレーシアへと輸入されていることを指摘している。この流通経路の詳細は解明されていないが、塩干魚を国際的に流通する商品として位置づける必要性を主張している。⁽²⁹⁾

赤嶺は、フィリピンの南沙諸島海域におけるサマ人のダイナマイト漁について調査を実施し、干魚の加工や流通について報告している。⁽³⁰⁾ マンシ島では一九八〇年代にダイナマイト漁の専門化が進んだ。マンシ島で

加工される塩干魚は、そのほとんどがミンダナオ島西端にあるサンボアンガに集荷された後、ダバオに輸送されミンダナオ島内陸部で消費される。すなわち、塩干魚はミンダナオ島のバナナやパイナップル、ココヤシを栽培しているプランテーションで働く農園労働者の動物性たんぱく質源として消費されてきた。この流通の要であったのは、サンボアンガとダバオの華人系の仲買商人たちであったが、生産者である漁民は仲買商人に経済的に従属をする傾向が認められた。⁽³¹⁾

ダイナマイト漁は、地域の環境にさまざまな悪影響を与える漁法であり、禁止されている漁法のひとつである。しかしこの問題を貧しい農漁民の立場を考慮に入れて考えれば、この漁法の禁止は別の問題を生み出してしまふ。漁民は魚をとり、干魚にし、ミンダナオ島へ売ることによって生活を維持している。この干魚はミンダナオ島の内陸部にある大規模な外資系農園で働く貧しい農園労働者のたんぱく質や塩分の補給源として無くてはならない食料源である。すなわち魚をとる者も、消費する者も政治経済的な弱者であり、ダイナマイト漁の禁止は彼らの生活を直撃するのである。ダイナマイト漁を生産、流通、消費の連鎖の中で捉えると、「爆破されたサンゴの代償として、漁民の生活が成り立ち、安い干魚の恩恵にあずかる農民がいる。外貨を稼ぐのは、干魚を常食とする農民である」ということができる。⁽³²⁾ダイナマイト漁の禁止によるサンゴの保全は、この流通上の人びとの生活の問題を抜きには解決できないことがわかる。

4 地域内を流通する海洋資源に関する研究

商業流通

スリランカの魚流通システムの特徴は、漁民から消費者までの流通のすべての段階において多種多数の中間業者がかかわっており、この結果、魚の価格を上昇させ、かつ不安定にさせている点であるという。すなわち、さまざまなタイプの集魚人、魚商、小売業、運送業がこの流通にかかわっている。

スリランカ南部沿岸地域の漁民社会を研究してきた高桑史子は、カワララの魚商人について研究をしている。一九三〇年以降、現金経済に組み込まれ、消費地コロンボにつながる全島を覆う流通機構の整備が進むとともにセイロン島の南岸域が鮮魚の供給地となった。このような経済的な背景のもとで漁民をやめて、魚商人や運送業者になる者が続出した。彼らは、水揚げした魚を集める者、集めた魚を幹線道路沿いの魚集荷所に運ぶ者、さらにコロンボに輸送するために集荷駅に魚を運ぶ者となり、流通の過程で重要な役割を果たすようになった。このように消費地の存在や流通機構の整備により、流通にかかわる多様な中間業者が出現した。これらの水揚げ後の魚の流通に関与する人は「ムダラーリ」と呼ばれている。彼らが商人として成功するためには、運、能力、財力に左右され、それゆえに女性を介在した姻戚ネットワークの拡充、経済力のある妻（多くはココヤシ繊維業の担い手）の存在などの条件を満たすことが必要であるという。また、ムダラーリと生産者である漁民との関係は、漁民がムダラーリに負債を負っていることが多いが、支配・被支配の関係ではなく、自由度の高い個人間の信頼関係であるという。³³ このパトロン・クライアント関係は、先

に紹介したフィリピンの事例とは関係のあり方が異なっている点が興味深い。

マレーシアのクアラルンプールを事例とした生鮮品流通における市場小売商に関する研究の中で、ジャクソン (Jackson) は鮮魚流通について言及している。³⁵⁾ ジャクソンによると、多様な水産物の中からの商品の選別や生産地から消費地までの輸送の段階では、仲買人や卸売業者などの中間業者が重要な役割を果たしているという。そしてひとつの卸売市場を頂点とした一元的で、階層的な取引関係の末端に多数の市場小売商が存在するという全体像が提示されている。

ベトナムのハノイに流通しているおもな鮮魚は、コイ類、ティラピア・タイワンドジョウ類、ナマズ・ウナギ類、エビ・カニ・貝類の淡水魚介類とアジ類やカツオ類、エビ・カニ・貝類などの海産魚介類である。淡水魚介類のうちコイ類とティラピアはおもに養殖で生産され、そのほかは捕獲されることが多い。池口明子は、市場経済が導入されたハノイにおいて鮮魚流通の実態を、仲買人・露天商の取引ネットワークや活動に着目しながら解明した。そしてその研究によって、ハノイへの鮮魚流通には、遠隔地から運ばれてくる海産物の流通経路とホンデルタからの淡水魚の流通経路が存在していることが判明した。すなわちハノイにおいては、冷凍海産魚の場合には、ジャクソンが提示したような卸売市場を頂点とした一元的な流通経路が形成されているが、淡水魚の場合には二カ所の卸売市場のほかに産地仲買人による供給など分散的な流通経路が存在している。³⁶⁾

日本における小規模沿岸捕鯨の鯨肉の商業流通および非商業流通に関する調査が、M・M・R・フリーマン (Freeman) や岩崎まゆみらによって一九八〇年代から開始され、その成果の一部が公刊されている。³⁶⁾ 鯨肉は、捕獲され、陸揚げされると、非商業用に分配する肉が取り分けられた後に、地域の市場をして全国の

市場へと商業流通する。流通のやり方や経路には、地域差がある。宮城県牡鹿町鮎川の場合をみると、水揚げされ、魚市場を通して販売されるミンククジラの赤肉の約三〇パーセントが鮎川内に、約一〇パーセントが隣接の集落に、約二〇パーセントが牡鹿町のほかの集落や石巻市などの周辺に、残りの四〇パーセントは全国へと流通する。肉は地元の仲買人によって地方の卸市場へ運ばれる。さらに東京のような大都市の中央卸売市場でセリにかけられ、そこから各地の小売商へと流通していく。

一方、「シロモノ」と呼ばれる脂皮、尾羽、ベーコンらの産物は、鯨肉とは別の経路で流通し、約九〇パーセントが県外へと販売されている。シロモノの約九〇パーセントがそれを好む山形県の加工業者へと販売される。網走で生産される脂皮の大半が、鯨汁を好む松前町へと送られ、尾羽や舌、ベーコンらは大阪へと流通していく。

鯨肉は儀礼的な交換や贈答に利用されている。捕獲された鯨の肉は、さまざまな形で分配されており、(1)鯨に関する情報を提供した漁船への分配、(2)捕鯨船の乗組員に対する分配、(3)解剖員に対する分配、初漁の返礼としての分配（お神酒をもらった漁業関係者が、送りに返礼する分配）、(4)新造船の進水式の時の分配などがある。分配を受けた人は、鯨肉の一部を、さらに家族、親族、近所の人などへと分配する。この贈答のネットワークに属する人びとは、(1)親族、(2)知人・友人・隣人、(3)商売関係者である。フリーマンらによると、親族は、知人・友人・隣人よりも多くのお神酒返しをもらい、知人・友人・隣人は商売関係者よりも多くもらっているという。さらに、商売関係者との間では、サーリンスのいう「均衡のとれた互酬的な」交換が、親族・知人・友人・隣人との間では「一般化された互酬的な」交換がみられるという。²⁷⁾すなわち、鯨肉の非商業的な分配には、社会関係や二者間の儀礼的なやり取りと深くかかわった活動であるといえる。

以上のように日本における小型沿岸捕鯨による鯨肉の商業的および非商業的な流通は、地元社会にとって経済的のみならず、社会的、儀礼的に重要であることが分かる。

非商業流通

非商業流通の場合には、流通の範囲が隣接地域より遠く国外に及ぶことは、朝貢交易や儀礼的な交易を除けば、少ない。大半が、生業活動による産物についての居住地内や隣接地域との物々交換や分配である。

ソロモン諸島のマライタ島フアナレイでは、財貨であるイルカの歯を入手するためにイルカ漁を行ってきた。竹川大介は、イルカ漁、イルカの肉や歯の分配と利用に関する調査を実施した。³⁸ イルカ漁が終わると捕獲されたイルカはいったん村の前浜に集められ、男たちは寄合小屋に集まり、その日の肉と歯の分配が決められる。分配の際には、「マリコイア」と呼ばれる長さ三〇センチ直径一〇センチほどの肉のブロックが単位となる。マリコイアは、村の中で第一次分配されるが、分配を受ける単位は、核家族である。すべての村の核家族に平等に分配される。頭部や鰭についての残りの肉と心臓は、解体に従事した者の取り分になる。イルカが捕獲されたという情報が流れると、山に住む農耕民は焼畑で栽培したイモやバナナを持って浜にやってくる。農耕民は、親戚縁者の家族を訪ね、農作物とイルカの肉を交換する。また、三〇〇頭以上のイルカが取れた大漁時には、村の女たちはカヌーを漕いで遠くの村まで売りに行く。また、イルカが捕獲された時に定期船がやってきた場合、肉を高値で売ることができると首都に送ることがある。さらに、首都に住む親戚に肉を贈与する場合もある。このように村内では平等に分配された肉が、交換や販売、贈与を通して広域に流通していく。

イルカの歯（二頭から約一六〇本の歯がとれる）は、裝飾財や特殊交換財、多目的貨幣としてマライタ島で使用されている。イルカの歯の頭飾り（「ロダリ」）は、母から娘へと代々受け継がれる。婚資や香典としてイルカの歯（一〇〇〇本単位）が使用されることがある。また、イルカの歯は、ローカルマーケットや雑貨屋で日常的に貨幣として使用されている。このような財貨であるイルカの歯は、肉とは異なった分配のされ方をする。最初に歯の総数の一割ずつが村と教会に分配される。残りの八割を、出漁した家族、出漁しなかった家族、未亡人・老人で分配される。出漁した者がいる家族の取り分を一とすると、出漁しなかった家族は半分、未亡人や老人は四分の一となる。このようにイルカの歯は、イルカの肉とは違って、不平等に分配され、その後マライタ島一円に流通するのである。³⁹

トレス海峡のマビアグ島を中心に先住民の漁撈文化を調査した松本博之は、ジュゴンやカメの解体手順について詳細な報告を行っているが、その中で、分配方法や流通についても言及している。⁴⁰ マビアグ島では、ジュゴンの捕獲頭数が一頭か二頭以上かによって分配の範囲に違いが出てくる。たとえば、二頭以上の場合には、捕獲者たちが主要な部分をとりながらも、村人すべてに分配するという。さわめて平等的な色彩が強い。一方、一頭の場合には、分配の範囲が親族集団に限定される傾向がある。一方、ハモンドでは、各部位が均等に分けられ、村全体に分配されるが、余剰の肉は木曜島で販売されるという。⁴¹ このようにジュゴンの肉は、狩猟者の居住地や親族関係に基づいて分配され、地域内で消費されるとともに、居住地外へも現金を介して流通している。

アメリカのアラスカとワシントン州オリンピア半島、カナダの極北地域、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国のベクウェイ島、グリーンランド、ロシアのチュコト半島、インドネシアのレンバタ島

では、先住民による捕鯨が実施されている。⁴³ インドネシア以外の上記の地域における先住民の捕鯨は、国際捕鯨委員会によって先住民生存捕鯨として承認されている。彼らの捕鯨は、基本的には地域消費もしくは自家消費用であるため居住地内や近隣の地域内で分配や流通が実施される傾向にある。

バクウエイ島の捕鯨においては鯨肉や脂皮の大半は現金で取引されているが、国際捕鯨委員会はその捕鯨を先住民生存捕鯨であるとみなしてきた。浜口は、分配と販売について報告している。同島の鯨捕りには賃金は支払われておらず、分配のルールに従って鯨肉など現物が支給される。一八等分された鯨肉は、二人の捕鯨ボート所有者、二人の乗組員、一人の見張り、複数の解体処理施設の所有者に分配される。その分配比率は、ボートの所有者が二配分ずつ、乗組員と見張りにはそれぞれ一配分ずつ、そして複数人の施設所有者全員に対し一配分である。また、脂皮は三等分され、(1)二人のボート所有者に一配分、(2)二人の銚手と二人のボートキャプテンに対し一配分、(3)銚手とボートキャプテン以外の乗組員(八人)と見張り(一人)、施設の所有者(複数名が一人分)に対し一配分が与えられることになっている。⁴⁴

各人の取り分のうち自家消費分と親族や友人への贈与分以外は、販売される。このような流通経路で、島中に肉が行きわたる。売れ残った鯨肉は、塩漬けにされた後、日干しにされ、セント・ヴィンセント島のキングスタウンの魚市場に出荷される。海外に輸出されることはないが、バクウエイ島とその近隣の島には流通していることがわかる。バクウエイ島の場合には、鯨肉や脂皮の分配と流通は、食料としての重要性以外に社会関係や文化の維持と深くかかわっている。⁴⁴

5 海洋資源の流通と管理をめぐる問題——流通と資源の枯渇化

歴史的にみると、一八世紀末から一九世紀はじめにかけてのラッコの毛皮交易が、北アメリカ北西海岸地域のラッコの捕獲過剰を生み出し、資源の枯渇化を結果した。国際市場で需要が高い特殊海産物のような資源は、需要がある限り、当該資源の枯渇化を生み出す可能性があることを示している。

高緯度地帯と低緯度地帯とは、水産資源の多様性や豊度には大きな違いがあるため、断定はできないが、アジア・太平洋地域においても、ナマコ、フカヒレ、カツオ、エビ、真珠貝やタカセガイなどの貝類などに関し外部社会からの需要に応じるために生産過剰が報告されており、資源の枯渇化や生産地の環境破壊、現地の生活の悪化に伴う健康問題の発生などが懸念されている。

鶴見のナマコ論と秋道のエスノネットワーク論の中に出てくる消費者は、当初は中華世界（や太平洋の島嶼世界）であり、ヨーロッパ社会ではなかった。しかし熱帯魚やタカセガイ、真珠貝などのように欧米社会や日本、オーストラリアを消費地とする商品となる魚介種も存在している。このようにみると、現在では、香港やシンガポールを消費地とする華人社会へのネットワークと欧米や日本など高度に発達した資本主義社会を消費地とする資本主義社会への複数のネットワークが複雑に絡み合いながら共存しているといえよう。そしてこれまでの議論の展開からすると、華人世界や欧米・日本などの特殊海産物への需要が高ければ高いほど、ネットワークの一方の極にある漁民（生産者）の経済や社会の変化や、漁法によっては漁場環境の破壊や資源の枯渇化を生み出す傾向があるといつてよいだろう。

近年、ナマコの資源量を維持するために、捕獲を制限しようとする動きが、アメリカを中心にみられる。この動きに対して、生産者と消費者の間に位置する香港の卸売問屋が、資源管理に関心を示しはじめている。ナマコのような特殊海産物資源の持続的利用の可能性を考えるためには、生産者の活動のみならず、流通過程に関わる人びとや消費者の動きを視野にいれる必要があるだろう。

これまでみてきたように、居住地内や居住地の近隣地域内で流通している水産物の大半は、自家消費用もしくは生業用である。しかし、生業目的の捕鯨で捕獲されたイルカやシロイルカ、ジュゴンの余剰分は、居住地の外へと販売、流通している。一方、日本の商業目的の小規模捕鯨でも鯨肉の一部は、分配や贈答のネットワークを通して現金を介することなく流通している。鯨類の場合、地元密着型であれば、生業用であれ、商業用であれ、親族や友人、近所の人への流通に関しては重なり合う点があり、両者を峻別することができない。さらに、両者とも、鯨肉の地域社会内の非商業的流通は、食料の供給、社会関係の確認と維持などと深くかかわっている。

商業流通を目的としない海洋（水産）資源でも、居住地内や近接地域内に根強い需要があれば、捕獲技術が向上した現在では、捕獲過剰も起こりえる状況にある。一方、一九八三年以前のカナダ・イヌイットによるアザラシ猟のように、部分的には商業目的で捕獲していた資源でも、資源量の再生産が可能であった事例が存在している。

以上から、商業用であれ、非商業用であれ、需要と供給に深く関係する水産物の消費者および彼らと生産者との間に介在する流通過程やそのネットワークを研究することは、資源の保全や持続的利用を考えるうえで重要な研究課題であると考える。そして、特定の流通ネットワークにかかわる人びとの社会生活に関する

民族誌を作成することが望まれる。

6 本書の構成

第一章にあたる序論では、海洋資源の流通と管理に関する人類学的な研究をレビューした上で、問題点を確認する。そして本書の内容について簡単に紹介する。

第一章に続く論文は、アラスカとカナダの北西海岸地域、ロシア極東地域のサケ資源に焦点をあわせた研究である。

井上敏昭は、アラスカのユーコン川上流に住む先住民グイッチンの生業活動としてのサケ漁およびサケの分配の社会的な意義を論じている。サケ漁とサケの分配は、グイッチンとしての生き方やアイデンティティと深く関わっており、さまざまな工夫をしながら実践していることが紹介される。また、大型哺乳動物の狩猟とは異なり、サケ漁には性差による禁忌はなく、フィッシュキャンプが伝統教育の場となっていることも指摘されている。そして最後に、サケが川を遡上する資源であることやその溯上が国境をまたがっていること、同一国内でも管轄が異なる地域を通過していること、同一の資源について複数の利害関係者が存在していることが、ユーコン川におけるサケ資源の利用と管理、流通に関して状況を複雑にし、複雑な対立を生み出しているという。そしてここで指摘された状況と対立、対立の解決をめぐる研究は今後の課題として提示されている。

手塚薫は、アラスカ州コディアック島の先住民アルーティックによる商業サケ漁およびサケの加工と販売

流通についてアラスカにおける水産業や国際的なサケビジネスの動向と関係づけながら紹介している。そのうえで先住民にとつてのサケ資源の経済的かつ社会・文化的な重要性、天然サケと養殖サケをめぐる鮮度や安全性、販売競争の問題、資源管理の問題を論じている。

岩崎まさみは、カナダ北西海岸のアラートベイに住む先住民ナムギースのサケの利用についてボアズの『クワキウトルの民族誌』をもとに記述し、検討している。同民族誌を見る限り、多様なサケ料理のやり方があったかがわかる。岩崎は、「サケの民」として繁栄してきたナムギースの人びとのサケ漁が、カナダ政府の政策やそれに関連するサケ資源の枯渇化などにより衰退してきた歴史を振り返ったうえで、その衰退が先住民漁師の失業という経済問題のみならず、多様な社会問題を若者世代の間に生み出したことを指摘する。さらにサケ漁を失うことは民族的なアイデンティティの存亡にかかわる文化的な問題であることも指摘している。そのうえで、現在進行中のランドクレームの交渉によつて先住民のサケ漁が承認されるならば、状況が改善される可能性を示唆している。

渡部裕は、ロシアのカムチャツカ半島におけるサケ資源の漁獲と分配、流通の歴史と現状を、紹介している。ソ連が崩壊し、ロシア連邦が成立してから急速に経済の自由化が進み、その影響をうけて地域経済は悪化をたどった。しかしトナカイやサケについて二〇〇六年から新たな政策が実施され、状況が変わりつつある。たとえば、サケについてはオブシーナ制という一定の要件を満たす先住民団体に漁獲枠にそつて配分されるようになった。サケは国家や企業、先住民にとつて経済的に重要な資源であるが、いまこそ先住民にとつて経済的文化的に重要な資源であることを先住民は強調すべきであると渡部は主張している。

以上の四編はアメリカ、カナダ、ロシアの先住民の生業としてのサケ漁と商業としてのサケ漁に関する報

告であるが、すべての事例において先住民はサケ漁をめぐって苦しい立場にあることがわかる。そして国際的に流通させるためのサケ資源の捕獲や国家による漁獲規制が、先住民のサケ資源の捕獲や利用に大きな制約を課しているといえるだろう。

次の論文は、カナダのニューファンドランドにおける非先住民によるアザラシの商業捕獲である。

過去四〇〇年間にわたって商業アザラシ漁はカナダの大西洋地域の漁民の生活や地域全体の経済に大きく貢献してきた。しかしながら欧米における反アザラシ漁運動の結果、一九八三年には欧州市場（流通の最終的地）からカナダ産アザラシ製品が締め出されてしまった。このため、カナダの大西洋地域のアザラシ漁師は、カナダ極北地域のイヌイットとともに甚大な経済被害をうけた。浜口尚は、カナダの大西洋地域（ニューファンドランドとラブラドル）における商業アザラシ漁について、その歴史、欧米における反アザラシ漁運動、現在のカナダにおけるアザラシ資源の管理政策、産物の加工・流通、現在のタテゴトアザラシ漁について報告している。カナダのアザラシ漁の事例は、生業目的であれ、商業目的であれ、その存続は欧米社会の政治・経済的な動向や決定によって左右されることを示している。

続く五編はアジア・太平洋地域の熱帯や亜熱帯地域における海洋資源の利用や流通、管理に関する報告である。

鹿熊信一郎は、アジア太平洋地域では、中華料理の食材としての魚や観賞魚が、サンゴ礁域において爆弾漁やシアン化合物漁のような破壊的な漁業によって捕獲されたり、養殖されたりしながら、消費地へと流通したことを報告し、論じている。鹿熊は漁業を維持するという立場に立ちながら、インドネシアやフィリピン、沖縄における爆弾漁、シアン化合物漁、魚類養殖、籠漁、活魚流通、サンゴ養殖・流通の実態を紹介し、

定量的な調査の不足やサンゴ礁を破壊する上記以外の要因を指摘したうえで、アジア太平洋地域におけるサンゴ礁生態系の保全とサンゴ礁漁業・養殖のバランスをとるアジア太平洋の里海化の可能性を提案している。ナマコは、中華料理の重要な食材であり、香港などを中心に国際的に流通している特殊海産物である。赤嶺は、ガラパゴスで発生した「ナマコ戦争」とナマコがワシントン条約の対象種に取り上げられた背景を説明した後、香港のナマコ輸入業者（流通業者）のワシントン条約への対応と北海道の利尻島における高級ナマコの生産と管理について紹介し、流通部門が資源管理において果たすべき役割について論じている。そしてナマコを事例として商業的に価値のある資源は過剰捕獲を生み出す傾向がみとめられるが、流通業者による自己規制や生産者の資源管理に注目し、消費や商業流通が生産を規定することなどを例証している。赤嶺は、この研究を多重地域研究の試みと位置づけている。

橋村修は、シイラの捕獲と利用、流通についてハワイ、コスタリカ、中国、台湾、日本で現地調査を実施してきたが、その結果としてシイラの利用については地域・文化差や時代差がみられることを検証した。本書では、ハワイのシイラ市場と生産地であるコスタリカの関係を中心に報告している。ハワイで観光客や白人を中心に好まれているシイラの需要を満たすために、一九六〇年代には日本から、その後には台湾から、一九八〇年代からは中南米からの輸入が多くみられるようになった。中南米からは真空パックにされたシイラが、東アジアからは冷凍のシイラが輸入されている。橋村は、魚食文化が観光化や世界システムの枠組みの中で再編されていることを紹介している。

竹川大介は、バヌアツ共和国フツナ島における海産資源と農産資源の生産、管理、贈与、交換、タブーについて報告し、分析している。竹川は、フツナ島におけるさまざまなタブーや集団漁の参加者への獲物の平

等分配、島間の儀礼的取引、ヤムイモの交換、大型回遊魚とバナナ・キャッサバなど農作物の相互贈与を紹介し、分析している。その上で、彼は、タブーや贈与交換は、それ自身説明されるものではなく、なにか起きた時に、後付的にそれが起きた理由を説明するために用意されている説明原理の一つであると主張している。

松本博之は、オーストラリアのトレス海峡諸島における先住民によるジュゴン・ウミガメ猟とその肉の分配、および近代漁業としての真珠貝・イセエビ漁からの収入を事例として報告している。松本は、トレス海峡諸島民のような第四世界の先住民の場合、植民地体制のエンジェントであったキリスト教の布教者や政府が一方で「保護隔離政策」や「同化政策」のもとで変容をうながしながらも、他方では少なからず贈与交換を基調とした先住民社会の再生産に関わってきたという点を強調している。トレス海峡諸島の先住民社会の流通では「もの」よりも「ものと結びつく人格」という価値観を基軸としながら展開しており、近代の市場交換に巻き込まれながらも、内旋的に贈与交換にもとづいた社会関係を再生産してきたと結論づけている。

最終章では、岸上が本書の成果の一部を要約し、今後の課題として二つの問題を提起している。このように本書は、環太平洋地域における漁獲物の流通と管理に焦点を当てた論文集である。本書に収められている論文は基礎的な調査の成果であるが、海洋資源の持続的利用のための管理制度の構築やその実践に貢献したという筆者らの思いが込められている。すなわち、本論文集は、実践を志向した研究の成果である。したがって、本研究はこれまでの日本における海洋民族学の新たな展開と位置づけることができる⁽⁴⁶⁾と考

【注】

- (1) Frith, R., *Malay Fisherman: Their Peasant Economy*, Routledge and Kegan Paul Ltd., 1966. 44, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000.
- (2) 西村や藪内の著作には、西村朝日太郎『海洋民族学——陸の文化から海の文化へ』日本放送出版協会、一九七四年／西村朝日太郎『海洋民族学論考』（小川博編）岩田書院、二〇〇三年／藪内芳彦『東南アジアの漂海民』古今書院、一九六九年／藪内芳彦編『漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究』風間書房、一九七八年などがある。秋道や田和については、次のような著作がある。秋道智彌『海人の民族学——サンゴ礁をこえて』日本放送出版協会、一九八八年／秋道智彌『海洋民族学——海のナチュラリストたち』東京大学出版会、一九九五年／秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海——水産資源管理の人類学』人文書院、二〇〇二年／秋道智彌・田和正孝『海人たちの自然誌——アジア・太平洋における海の資源利用』関西学院大学出版会、一九九八年／田和正孝『東南アジアの魚とる人びと』ナカニシヤ出版、二〇〇六年。また、飯田卓は、『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』（世界思想社、二〇〇八年）を出版している。そのほかに、高桑史子『スリランカ海村の民族誌——開発・内戦・津波と人々の生活』明石書店、二〇〇八年／野地恒有『漁民の世界——「海洋性」で見る日本』講談社、二〇〇八年などがある。
- (3) 鹿熊信一郎『南太平洋諸国と沖縄の水産技術交流に関する研究——沿岸資源管理とバヤオに主眼を置いて』沖縄県水産試験場、一九九八年。
- (4) 伊藤幹治『贈与交換の人類学』筑摩書房、一九九五年／岸上伸啓『狩猟採集民社会における食物分配——諸研究の紹介と批判的検討』『国立民族学博物館研究報告』二七巻四号、二〇〇三年、七二五—七五二頁など。
- (5) 秋道智彌『オセアニアにおける水産資源と交易』杉本尚次・中村泰三編『変動する世界のなりたち——地域・民族・文化』晃洋書房、一九九三年、六五—八二頁。
- (6) 秋道智彌『東南アジア・オセアニアの水産資源とエスノ・ネットワーク——しきたりと変容する漁撈文化』秋道智彌編『イルカとナマコと海人たち——熱帯の漁撈文化誌』日本放送出版協会、一九九五年、七一—五〇頁／秋道智彌、前掲書、一九九五年、一七九頁。
- (7) 秋道智彌、前掲書、一九九五年、一八二—一八六頁。

- (8) 秋道智彌「序・紛争の海——水産資源管理の人類学的課題と展望」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海——水産資源管理の人類学』人文書院、九一三六頁、二〇〇二年／岸上伸啓「海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』国立民族学博物館、七一四六頁、二〇〇三年。
- (9) たとえば、岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』国立民族学博物館、二〇〇三年／秋道智彌「 commons の人類学」人文書院、二〇〇四年。
- (10) 山尾政博「東南アジアの沿岸漁業管理をめぐる潮流——Community-Based Approach から Co-Management へ」『地域漁業研究』三七卷三号、一九九七年、三六一—三七六頁。
- (11) 山尾政博「地域資源管理と住民参加——東南アジア漁村の経験から」秋道智彌編『東南アジアの湿地帯における資源と経済——開発と保全の生態史的研究』平成10年度／平成12年度科学研究費補助金・基盤研究A(2)研究成果報告書』国立民族学博物館、二〇〇一年、二五一—三五五頁。
- (12) 秋道智彌「はじめに——東南アジアのエコトーンと生態史研究」秋道智彌編『東南アジアの湿地帯における資源と経済——開発と保全の生態史的研究』平成10年度／平成12年度科学研究費補助金・基盤研究A(2)研究成果報告書』国立民族学博物館、二〇〇一年、一一頁。
- (13) Hardin, G., "The Tragedy of the Commons." *Science* 162, 1968, pp.1243-1248.; Berkes, F., "Commons Theory for Marine Resource Management in a Complex World." pp.13-31. In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.), *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senni Ethnological Studies no.67), National Museum of Ethnology, 2005, pp.13-31.
- (14) Adams, T. J. H., "Modern Institutional Framework for Reef Fisheries Management." In N. V. C. Polunin and Callum M. Roberts (eds.), *Reef Fisheries* (Fish and Fisheries Series no. 20), Chapman and Hall, 1996.
- (15) Coull, J. R., *World Fisheries Resources*, Routledge, 1993, pp.144-179.
- (16) 岸上伸啓「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について」『国立民族学博物館研究報告』二五卷三号、二〇〇一年、一九三—二五四頁。
- (17) 鶴見良行『ナマコの眼』筑摩書房、一九九〇年。
- (18) 鶴見良行、前掲書、一九九〇年。
- (19) 赤嶺淳「フィリピンにおけるナマコ産業について」『族』三二号、一九九九年a、三六一—六二頁／赤嶺淳「熱帯産ナマコ資源利用の多様化——フロンティア空間における特殊海産物利用の一事例」『国立民族学博物館研究報告』二五卷一号、二〇〇〇年。

- 五九—一二頁／赤嶺淳「干ナマコ市場の個別性——海域アジア史再構築の可能性」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(国立民族学博物館研究報告 四六号) 国立民族学博物館、二〇〇三年、二六五—二九七頁／赤嶺淳「当事者はだれか?——ナマコから考える資源管理」宮内泰介編『コモンズをささえるしくみ』新曜社、二〇〇六年、一七三—一九六頁、など。
- (20) 赤嶺淳、前掲書、一九九九年 a、五一頁／赤嶺淳「南沙諸島海域におけるサマの漁業——干魚と干ナマコの加工・流通をめぐって」『地域研究論集』二巻二号、一九九九年 b、一四八頁。
- (21) 赤嶺淳、前掲書、二〇〇三年、二六五頁。
- (22) 飯田卓「マダガスカルにおけるサンゴ礁漁業の過去と現在」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』国立民族学博物館、二〇〇三年、三五四—三五五頁／鈴木隆史「フカヒレも空を飛ぶ」梨の木舎、一九九四年。
- (23) 秋道智彌、前掲書、一九九五年、四五—四七頁。
- (24) 田和正孝「ハタがうごく——インドネシアと香港をめぐる広域流通」秋道智彌・田和正孝共著『海人たちの自然誌——アジア・太平洋における海の資源利用』関西学院大学出版会、一九九八年、五二頁。
- (25) 秋道智彌「空飛ぶ熱帯魚とグローバリゼーション」『エコソフィア』七号、二〇〇一年、三四—四二頁／秋道智彌「熱帯の海」『季刊民族学』一一二号、二〇〇五年、二九頁。
- (26) 手塚薫「北米アラスカ州コディアック島におけるサケ漁業の現在——先住民による海洋資源の利用と流通」北海道開拓記念館編『十八世紀以降の北海道とサハリン州・黒龍江省・アルバータ州における諸民族と文化』北海道開拓記念館、二〇〇五年、一四三頁。
- (27) 手塚薫、前掲書、二〇〇五年、二五五頁。
- (28) 渡部裕「カムチャツカ先住民社会とサケ資源」『Arctic Circle』四八号、二〇〇三年、四一九頁。
- (29) 田和正孝、前掲書、二〇〇六年、一三四—一三五頁。
- (30) 赤嶺淳、前掲書、一九九九年 a／赤嶺淳、前掲書、一九九九年 b／赤嶺淳、前掲書、二〇〇〇年／赤嶺淳「東南アジアの海域世界の資源利用——「変化」という持続性」『社会学雑誌』一八号、二〇〇一年／赤嶺淳「ダイナミイト漁民社会の行方」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海——水産資源管理の人類学』人文書院、二〇〇二年、八四—一〇六頁。
- (31) 赤嶺淳、前掲書、二〇〇〇年、九三頁／赤嶺淳、前掲書、二〇〇一年、五〇頁。
- (32) 赤嶺淳「地域を読む——フィリピン南部住民の選択 上」『朝日新聞』(大阪本社版) 一九九九年六月三日朝刊。
- (33) 高桑史子「漁民? 商人?——スリランカのカラーワ・カースト」秋道智彌編『海人の世界』同文館出版、一九九八年、三

〇五頁／高桑裕子「スリランカ海村社会の女性たち——文化人類学的研究」八十年代出版 二〇〇四年。

- (35) Jackson, J. J., "Trader Hierarchies in Third World Distribution Systems: The Case of Fresh Food Supplies in Kuala Lumpur." In P. J. Rimmer et al. eds., *Food, Shelter and Transport in Southeast Asia and the Pacific*, Australian National University, 1978, pp.33-61.

(35) 池口明子「ベトナム・ハノイにおける鮮魚流通と露天商の取引ネットワーク」『地理学評論』七五卷一四号、二〇〇二年、八五八—八八六頁。

- (36) 岩崎・タッドマンまゆみ「人間と環境と文化——クジラを軸とした一考察」清水弘文堂書房、二〇〇五年／フリーマン、M・R編『くじらの文化人類学——日本の小型沿岸捕鯨』高橋順一ほか訳、海鳴社、一九八九年／Iwasaki-Goodman, M., "The Ayukawa-hama Community of Japan." In L. E. Spensel (ed.), *Endangered Peoples of Southeast and East Asia: Struggles to Survive and Thrive*, Greenwood Press, 2000, pp.69-89; Iwasaki-Goodman, M. and M. M. R. Freeman, "Social and Cultural Significance of Whaling in Contemporary Japan: A Case study of Small-Type Coastal Whaling." In E. S. Burch, Jr. and L. J. Ellanna (eds.) *Key Issues in Hunter-Gatherer Research*, Berg, 1994, pp.377-400.

(37) フリーマン、M・M・R編、前掲書、九四頁。

- (38) 竹川大介「イルカが来る村——ソロモン諸島」秋道智彌編『イルカとナマコと海人たち——熱帯の漁撈文化誌』日本放送出版協会、一九九五年、八九—一四頁。

(39) 竹川大介、前掲書、一九九五年、一〇四—一〇五頁。

- (40) 松本博之「トレス海峡諸島の漁労文化（調査報告）——マブイアグ島(Mabuia)を中心に」『民族学研究』四一卷四号、一九七七年、三六八—三八九頁。

(41) 松本博之、前掲書、一九七七年、三七八—三七九頁。

- (42) たとえば、大曲佳世「ロリノ村訪問記」『鯨研通信』四三〇号、二〇〇六年、一—九頁／浜口尚「セント・ヴィンセントおよびグレナディン諸島国ベクウエイ島におけるザトウクジラ資源の利用と管理」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』国立民族学博物館調査報告 四六、国立民族学博物館、二〇〇三年、四〇—四一七頁／Freeman, M. M. R. et al., *Iwuit, Whaling, and Sustainability*, Alhama Press, 1998.

(43) 浜口尚、前掲書、二〇〇三年、四〇八頁。

(44) 浜口尚、前掲書、二〇〇三年、四〇九頁。

- (45) 赤嶺淳、前掲書、二〇〇六年。
- (46) 最近の先行研究として、秋道智彌・岸上伸啓、前掲書、二〇〇二年、岸上伸啓編、前掲書、二〇〇三年、N.Kishigami and J. Savelle (eds.), *op. cit.*, 2005, などがある。